

障害者への対応

白川町立黒川中学校三年 各務 綾花

「障害者にとって、一番されて嬉しい事は何ですか。」
「やっぱり、自然に接してくれることが嬉しいかな。」

これは、佐野有美さんの講演会で、私が問うた質問とその返答です。これを聞いた時、私は、はっとしました。今まで、障害者を障害者と見ていたからです。

私には、障害を持つ妹がいます。『先天性多発性関節拘縮症』のため手足が不自由で、家では座っているか寝ている。学校では車いすに座っているという状態がほとんどです。自分一人では着替えもできない妹。だから、誰かが助けてあげないといけない。そう強く思っていました。そのように思っていたのは私だけではありません。家族の皆がそう思っていました。だから、何かを取ってあげるときも、歯みがきをするときも、着替えをするときも、自然と手が出てしまい、妹はほとんど何もせずに物事が進んでいく、ということがよくありました。一見これは、講演会で聞いた「自然に接する。」ということのように見えます。わざわざ口で「これやってあげようか。」

と言っているわけではないので、ある意味、これも自然に接するということかもしれません。

しかし、私は、これでいいのかと疑問を持ちました。なぜなら、自然に動いていたかに見えた行動は、全て「妹は障害者だから、どうせできないだろう。」という気持ちがあつての行動だったからです。遠いところにある物は取れないだろう。歯も一人ではみがけないだろう。着替えだって一人では何もできないだろう。そう決めつけていたのかもしれませんが、しかし、よく考えてみると、妹は座った状態のまま、左右の足を交互に押し出して動くことができます。そしたら、必要な物があるところまで自分で進んで取れたかもしれません。妹は、両手でなら物をつかめます。ならば、歯みがきだって自分でできたかもしれません。着替えも、少しはできることがあつたのかもしれませんが。だから私は、妹が自分でできることを見守ろうと決めました。そしてしばらくして、私は妹を「障害者だから」と決めつけないようになりました。そう思うきっかけがあ

ります。

その日、父は仕事へ行き、母と弟は外出していて、私と妹の二人だけで家にいました。母から妹の着替えを任されていた私は、妹の着替えは、全て私がやろうと思っていました。しかし、私が自分の着替えをしている間に、妹は、自分でパジャマをぬぎ、そして服に自分の顔と手を通していました。いつも服をぬがせるのだったって、着せるのだったって、母がやっているのを見ていた私は驚きました。そして確信しました。

「妹だってやれることはやる。」

のだと。ズボンも、妹だけでは着替えられませんでした。ボタンのとめることなどはできました。だからその後、歯みがきを妹一人にやらせてみました。すると妹は、洗面台の上に手をつけて体を支えたまま、歯みがきをしていました。それどころか、歯をみがき終えた後、自分でコップに水を入れて、その水で口をゆすいでいました。今まで、手伝わないとできないと思っていたことを、妹は普通にやってのけました。これをきっかけに、私はその日から必要以上に妹を手助けしなくなり、また妹を障害者と限定して見なくなりました。今では学校の友達のように笑い合い、また妹として言い合いもしています。

そんなある日、妹は小学生の前で講演をしました。そこでは、自分ではできないこと、自分でもできること、学校での様子、人との関わりなど、様々なことを話していました。そんな中で、妹が話した、私の心に今も深く残っている言葉があります。

「私は、お姉ちゃんとかけっこをしたいです。」

という言葉です。この言葉を聞いたとき、心が熱くなりました。私も望んでいたことだからです。

今は歩けない妹ですが、沢山のことを自分でこなす妹なら、きっと歩ける日が来ると思います。だから私は、妹との夢を胸に毎日楽しく、妹と過ごしていきたいです。